

学 位 論 文 要 旨

氏 名 若井（澁江）裕子

題 目 アタッチメントとレジリエンスの関連

- 獲得された安心感や修正アタッチメント体験の視点から -

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

自然災害、身近な人の喪失、人間関係の軋轢、被虐待体験など、人生にはつらい出来事が存在し、そのような出来事が精神的な障害や不適応を引き起こすことがある。しかし、つらい出来事が必ずしも不適応などに結びつくわけではなく、同じような体験をしたとしても、損傷の程度や、そこからの回復には個人差があることが指摘されている（窪田，2006）。

1980年代以降、前述したような高いリスクにさらされた子どもたちの中に、困難を乗り越えてうまく適応し、健康に生活している子どもが少なからず存在することから、レジリエンス（resilience）という概念が注目を集めた（小塩，2009）。レジリエンスとは、「困難、あるいは重篤な人生経験に対してうまく適応する過程や結果、特に外的、内的な要求に対して、精神的、情緒的、行動的な柔軟性や順応性をもってうまく適応する過程や結果」と定義されている（American Psychological Association，2008）。

一方、Bowlby（1973）は、動物が生まれながらにもつ、安全を維持するために保護的な役割をしてくれると予想される他の個体に接近し、近い距離を維持するという一次的な行動制御システムをアタッチメントと定義した。そして、子どもが主な養育者との間に形成するアタッチメントは精神的な健康と関連することを指摘した。

本研究では、精神的な健康と関連すると推察されるレジリエンスやアタッチメントに着目し、3つの研究を行った。すなわち、先行研究の指摘から、アタッチメントとレジリエンスは関連するという仮説を立て、それらの関連を量的、質的に検討した。そして、不安定なアタッチメントを形成してしまった子どもたちが適応的に生きていくために、子どもたちのレジリエンスをいかに高めるのか、子どもたちに対して教師などに何ができるのかを検討した。

まず、研究Iにおいては、ネグレクト、身体的虐待、心理的虐待、DV、貧困など、PTSDを発症し得るような過酷な成育歴を有し、殺人未遂や暴言などの問題行動を多発させていた6歳女児が、献身的な担任教師との相互作用を通して問題行動を減少させていった事例（書籍）を分析した。そして、誰もが経験するようなストレスフルな環境へのレジリエンスではなく、通常は経験せず、PTSDを発症し得るような大きなストレスへのレジリエンスの発揮や育成過程を、担任教師とのアタッチメント

という視点から分析した。

その女兒と教師の言語や非言語を書籍から抜き出し、グラウンデッド・セオリー・アプローチなどの分析方法を参考に分析した結果、教師の言動は始終一貫しており、児童が叔父に刺され重傷を負ったり、被虐待経験を語ったりなど、児童が保護や支援を必要とした時に、その教師は、一貫して、手当てをしたり、話を聞いたりといった、その児童のアタッチメント欲求に応える関わりをしていたことが示された。そして、そのような一貫して継続的な教師の関わりは、児童に安心感を与え、その安心感は、児童がすでに形成していた不安定なアタッチメントスタイルを修正したことが示唆された。

次に、研究Ⅱにおいては、研究Ⅰの結果から、重要な他者から獲得された安心感は、個人の不安定なアタッチメントを修正し、レジリエンスの発揮や育成に貢献し得るとの仮説を立てた。そして、重要な他者から獲得される安心感を測定する尺度を作成し、レジリエンスやアタッチメントを測定する尺度と併せて実施した。そして、相関関係の分析や、クラスター分析によって分類したアタッチメントの3群、すなわち、安定因子得点が顕著に高かった群である安定クラスター、アンビバレント因子得点が顕著に高かった群であるアンビバレントクラスター、どの因子得点も中庸であった中庸クラスターの3群におけるレジリエンスや獲得された安心感得点の分析を行った。その結果、①アタッチメントの安定因子得点とレジリエンス得点には正の相関関係があること、②アタッチメントのアンビバレント因子得点とレジリエンス得点には負の相関関係があるが、アンビバレントクラスターに分類され、レジリエンス得点が高い人は、両親以外の重要な他者から得た安心感が高かったこと、③アタッチメントの回避因子得点はレジリエンス得点と関連がないことが明らかになった。

最後に、研究Ⅲにおいては研究Ⅱと同様の質問紙調査に併せて、アタッチメントに関するエピソードや重要な他者との関わりを問うための面接調査を実施し、アタッチメント、レジリエンス、獲得された安心感を質的に検討した。そして、①重要な他者（SO）から獲得された安心感が必ずしもアタッチメントと関連するわけではないこと、②幼少期に形成されたアタッチメントスタイルや内的作業モデル（IWM）がその個人に与える影響は大きいこと、③SOがその個人が有している不安定なアタッチメントスタイルを修正したり補足したりすることも可能であること、④親のような愛情を伴った、一貫して継続的なSOの支援は、その個人がすでに有していた不安定なIWMと現実との間に乖離を生じさせ、そのことによって幼少期に形成されたアタッチメントスタイルやIWMの影響力を弱められる可能性があることが明らかになった。

以上のように、本研究では、レジリエンスにはアタッチメントが概ね影響しており、幼少期における養育者の関わりが、その個人に与える影響が大きいことが明らかになった。しかし、人間には自分の人生を切り拓く力、すなわち、自分の人生が自分の置かれた環境によって左右されるのではなく、自分の人生を自分で選択し、変化させることもできるという可能性を有していることも示唆された。そして、そのような自分の人生を切り拓く際に、教師などの第三者の支援が有効になり得ることが明らかになった。